山岡鉄舟（三）

南條範夫

文春文庫 282—2

山岡鉄舟（二） 定価 400円

1982年3月25日 第1刷

著者 南條範夫
発行者 杉村友一
発行所 株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本 Printed in Japan

文春文庫

山岡鉄舟
(二)

南條範夫

文藝春秋

山岡鉄舟 (二) 目次

大政奉還 7
鳥羽・伏見の戦 46
敗軍の将 85
朝敵罷り通る 135
江戸開城 196
彰義隊 234
転　変 272
揺らぐ駿府 310

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

山岡鉄舟

(二)

大政奉還

慶応二年十二月二十五日夜十時頃、京都松原に住む医師土肥春耕の表戸を、慌(あわただ)しく叩くものがあった。

書生の一人が起きて行って戸を開くと、ただならぬ顔色をした男が、至急、春耕に会いたいと言う。

男は閑院宮家からの使者で、

――直ちに、迎えの駕籠に乗って伺候するように、

と、宮家の命を伝えた。

春耕土肥一十郎は、長崎で蘭方の外科を学んだ医師である。医は春耕一代のものではなく古くから十七代に亘っての家業であり、主として堂上の公卿を患家としていた。春耕は閑院宮家の侍医を拝命していたが、勿論、閑院宮家のみを対象としたものではなく、公卿一般を対象としていた。

宮家から召命を聴くと、春耕は、何かの椿事(ちんじ)によって負傷者が生じたものと考え、所要の外科要具と薬材とを用意して、とり急ぎ迎えの駕籠に乗った。

ところが、意外にも駕籠の行く方向が、いつもと違っているようなので、小さな覗窓の垂れを上げて外を見ようとすると、外部からしっかりと閉めつけられている。駕籠際について小走りについてくる者に声をかけて、不審を質しても、何の返事もない。

毎日、血なまぐさい噂を聞く頃のことだ。

不安の念に駆られながらも自己の職業を考え、何びとかが秘密の手当を必要とする負傷を受け、宮家の名をかたったのであろうと判断した。

駕籠はやがてどこかの門内に入ると見え、地上に下ろされた。

外に出てみると、愕(おどろ)くべき壮大な玄関である。そこに待ち受けていたのが、患者として数回顔を合せたことのある公卿の一人であったので、春耕はほっとした。

しかしその公卿は春耕に一言の質問も許さず、手をとるようにして長い廊下を導いていった。

いくたびか廊下の角を曲るうち、それが間違いなく御所であることを知って愕然(がくぜん)とした時、春耕は広い座敷の奥の、やや狭い部屋に導き入れられた。

みると五寸ほど高くなっている座敷の上段の間に寝具が敷かれ、四十には若干足りないと思われる総髪の貴人が横臥(おうが)している。その囲りに五、六人のものが心も空に立ち騒いでおり、傍(かたわ)らに、顔見知りの宮廷侍医が二人、顔面蒼白となって控えていた。

医師としての職業的本能から、春耕は物を問う間もなく横臥する人の傍らににじり寄ってみると、白羽二重の寝衣や、敷布団はもとより、半ば撥(は)ねのけられた掛蒲団に至るまで、赤黒い血汐にべっとり染っている。

横臥している人は、脇腹を鋭い刃物の先で深く刺され、もはや手の下しようもないほど、甚しい出血に衰弱し切って、ただ最後の呻(うめ)きを力弱くつづけているに過ぎない。

春耕は仔細に調べた上、自己の蘭方外科術をもっては、すでに如何ともなし難いことを確認すると、絶望の合図をした。

――今宵のこと、固く固く、他言無用、

と、何度か念を押された上、春耕は帰宅を許された。

自宅に戻ってからも、この夢の如き出来事に亢奮冷めやらぬ春耕は、直ちに筆をとって、その日の日記に、この意外な事実をつけ加えた。

その記事の中で、春耕ははっきりと、上記の貴人を「お上」と断定している。彼が連れてゆかれた処がまこと御所であるとすれば、それ以外ではあり得ないとみたのであろう。

また、かの傷は恐らく、鋭い槍先で、斜下方から突き上げられたものと断定している。と同時に、自ら疑問を提出して、当今、如何に乱世とは言え、天子が御所内においてそのような目に遭われることがあり得ようかと疑い、更に一転して、

――もしあり得べくんば、後架に上られた後、縁側の雨戸を一枚開いて手を清めておらるる際、縁下にひそんでいた刺客が、短槍で、下から斜め上に突き刺し奉ったものであろうか、到底思議すべからざる椿事、畏るべし、畏るべし、

と結んだ。

土肥春耕は、私の母方の祖父である。頑迷謹直の男であった。亡き母の記憶に残っている明治十年代においてさえ、町家の患者に対しては、何かの折に、

――きさまら素町人めが！

と怒号したと言う。若い頃長崎に留学し、蘭学を学んだと言うにしては、まことにふさわしからぬ旧弊固陋の人物である。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

それだけに、この祖父が舞文曲筆して偽りを記すとは思われない。それにこのような事を捏造したとて何の利益もありはしない。

春耕の死後、その日記を読んだ母と、母を娶った父との二人から私はこの話を聞いた。

むろん、戦前のことであるから、

――決して他言してはならぬ、

と固く戒められた上である。

戦後、初めて私はこの事実を文字にして公表した。二つの全く別のルートから、この事実を裏書きする証言を得ている。

ただ、残念ながら春耕の日記は、関東大震災の折、灰燼に帰してしまったので、私は物的証拠を提出することができない。私の祖父は決して偽りを記す人物ではないと言う確信と、私の記憶とを頼りに、一つの史料としてここに提出する。

孝明帝暗殺の噂は、帝の崩御後、直ちに、極めて広く流布されたらしい。ただ、それはほとんどすべてが、毒殺説であり、私の前に刺殺説を述べた人はいない。

推測が許されるならば、毒を盛られて衰弱の極にあった帝が、後架に上られた後、侍女に扶けられて手を清められようとした際に、弑逆に遭われたものでもあろうか。

宮中にはむろん、侍医が常時待機していた筈である。だがそれは内科の医師であろう。宮中において外科医が必要となることは極めて稀であろうから。

そこで侍医の一人が、その名を知っていた土肥春耕を指名し、召寄せたのではないか。

通説となっている毒殺説についても、簡単に述べておく。

孝明帝は、十二月十一日、風邪気味の身をおして内侍所の神楽を見られたが、その翌日からひ

どい発熱で、医師は、十四日、痘瘡と診断した。
高熱と不眠とがつづいたが、十八日頃から順調に回復に向い、側近の者もほっと一息ついた。
ところが、二十四日夜から、病状が突然悪化し、翌二十五日には嘔気をもよおし、痰が多く、ひどい衰弱が見られた。そして、その夜十一時、崩御された。
御齢三十六歳。
これが公式の発表である。
これに対して毒殺説は、二十四日の容体急変は、何者かが毒をすすめた為であるとする。
その一は、悪瘡発生の毒を献じたと言うもの、
その二は、帝が筆の穂先をなめる癖があったので、穂先に鴆毒を塗ったか、硯の中に毒液を入れておいたとするもの、
その三は、宮女の一人が買収されて、砒素を薬湯と共にすすめたとするもの、
現在の医師の中には、当時の拝診日記を分析して、薬物中毒症状を認めている者もある。
将軍家茂が死んだ時も、一橋慶喜が手を回して毒殺したのだと言う噂が、かなり拡がっていた。貴人の急死に、毒殺説は珍しくない。
従って、これらの毒殺説、刺殺説をすべて、信ずるに足りない雑説、風説として却けてしまうこともできる。戦前の歴史書はすべてその立場をとった。
だが、孝明帝の場合、暗殺説があまりに根強く、語りつがれている。そしてその暗殺を企てた首謀者としては、すべての人によって同じ名が挙げられている、曰く、
——岩倉具視
明治維新の最大功労者の一人であるこの人物が、帝暗殺者の汚名を被せられているのは、一体

どうした訳であろうか。

当時のイギリス公使館員アーネスト・サトウは、帝の毒殺説について、

――この帝は外国人に対する如何なる譲歩にも真向から反対してきた。そのために、来るべき幕府の崩壊によって、いやが応でも朝廷が西洋諸国との関係に当面しなければならなくなるのを予見した一部の人々に殺されたのだと言う、

と記している。他の一説は、

――この帝は佐幕派であり、倒幕実現の為にはどうしても障害となるので、暗殺されたのだと言う。

そしてそのいずれの場合にも、暗殺の黒幕は、岩倉具視と名指されているのだ。

一体この岩倉具視と言うのは、どんな人物だったのであろうか。

具視は堀河康親の次男に生れ、岩倉具慶の養嗣子となった。岩倉家は百五十石の貧乏公卿である。現代にしてみれば、せいぜい月給十四、五万円のサラリーマンの生活であろう。

多くの彼の同僚公卿たちは、無気力な貧しい暮らしを運命と諦め切っていたが、岩倉を始め少数のものは、現状から何とかして脱け出したいと考えた。

その為には当然、朝廷の権力を拡張せねばならぬ。だが、その彼らにしても、初めから、幕府を打倒しようと狙ったのではない。まだまだ、幕府の力は圧倒的なものに見えていた。

彼らは、従って、まず公武合体論を唱え、幕府と協力して国難に当ると言う形で、朝権を拡張しようと考えた。

岩倉が孝明帝の信頼を得たのは、帝が熱心な公武合体論者であったからだ。

文久二年、京が長州を旗頭とする急進的な尊皇攘夷論者によって制圧されると、岩倉は幕府と

通謀する奸臣として生命の危険を感じ、職を辞し、頭を丸めて、洛外に蟄居した。
翌年八月のクーデターで長州の勢力が駆逐されると、岩倉は京へ出入し得るようになり、薩摩の大久保、小松、西郷らと膝を交えて国事を談ずるようになる。
この間、時勢の変動ははげしく、幕府の衰弱の実体が次々に露われてきている。岩倉は敏感にそれを嗅ぎとり、公武合体論を超えて、王政復古を考えるようになった。
慶喜が将軍襲職を拒むポーズをみせた時、岩倉は、
――今こそ政権を朝廷に回復すべき好機、
と、四方に秘密の檄文を飛ばして猛運動を試みたが、ついに成功しなかった。根本の原因は孝明帝が依然として公武合体論であり、幕府を亡ぼすと言う意見を持っていなかったからである。
時代は、今や、孝明帝の意思を超えて滔々として流れようとしていた。帝はそれを阻む巨大な岩石であった。
そして、孝明帝の謎の急逝――巨岩は突如として取り去られた。
岩倉に忌わしい暗殺者の汚名が被せられたのは、帝の崩御によって、最も獲るところの多かった者が、この岩倉にほかならなかったからであろう。
帝の崩御に当って、岩倉は、
――仰天驚愕、実に言う所を知らず、臣の進退ここに極まり、血泣嗚号無量の極に至れり、臣の一身においては、吾事終れり、一世の果ここに止まり、片言といえども述るに所なし、
と言う恐ろしく大袈裟な絶望的な手紙を書いているが、それから何日もたたぬ正月の始めには、薩摩の井上石見に対して、崩御後の時局について滔々たる大建言書を送っている。
――もう何もかも終りだ、何も言うことはない、

と、泣血悲歎した筈の男が、十日も経たぬ中に、堂々たる時局論を開陳し、すぐその直後、自分の赦免復官運動をやっている。

その後の岩倉は、雲を得た竜の如くだ。縦横の画策を行い、薩長の有志と連繋し、最も活潑に倒幕運動を展開した。そして維新回天の中心人物の一人となりおおせてしまった。

これはすべて、孝明帝が生存しておられたならば不可能なことであったろう。

ここに、疑惑が岩倉に集中する理由が存在する。

その上、岩倉と言う人物を知っている者が、誰しも、

——あの男なら、その位のことはやりかねないな、

と考えた。

長州の周布政之助は、言っている。

——公卿などは何の能力もありはしない、衣冠束帯を剝ぎとって街頭に放り出せば、明日にも飢死するだろう。だが、岩倉だけは違う。あの男は天秤棒をかついで豆腐を売って歩いても、ちゃんと生きてゆく男だ。

この逞しい意力と、天稟の俊敏さとは、彼に一度でも会ったことのある者に、直ちに強い印象を刻みつけた。あの男なら必要とあればどんなことでもやると言う評価が、岩倉に暗殺首謀者の疑惑を定着させたのである。

話を、もとに戻す。

孝明帝の後は、典侍中山慶子の生んだ祐宮が嗣がれた。

慶応三年正月九日、践祚の儀式が行われたが、新帝はわずか十六歳なので、関白二条斉敬が摂政に任じられた。

幕府は、孝明帝の崩御を口実に、対長休戦から一歩を進めた解兵の沙汰書を、朝廷から出して貰うことにした。

将軍の死によって休戦を、帝の死によって解兵を獲得したのだ。もはや、幕府には実力を以て諸侯を制圧することが全く不可能であることを、天下に表明した訳である。

新将軍慶喜は、死力を尽して、この頽勢（たいせい）を挽回しようと努力した。

老中の板倉・稲葉両人を両翼とし、原市之進を目付に任じ、永井尚志を若年寄に抜擢し、側近を固める。

フランス公使ロッシュのすすめに従って、軍事力の近代化を図ることとし、フランス士官シャノアン、ブリューネー以下十八名の教官を招き、横浜太田陣屋の伝習所で、歩兵、騎兵、砲兵の三兵の教育を開始した。

フランスとの提携を強めるため、弟の徳川昭武をパリに送り、親仏派の栗本鋤雲（じょうん）をも派遣した。

慶喜の次々に打つ手は、反幕派の人々を刺戟した。岩倉は、

――このところの慶喜の行動をみると、その志は小でない、軽視すべからざる強敵だ、

と言っている。

従五位下、伊勢守高橋精一はこの年、遊撃隊副頭を仰せつかった。義弟の鉄太郎は剣名のみ高く、依然として貧乏御家人だ。

その鉄太郎のところに、ひょっこり専蔵が現れた。

「しばらく姿を見せなかったな、商売の方は、うまくいっているのか」

「はい、とりあえず石炭屋をやって、外国船に石炭を売りつけております」

「商売をやるからには、うんと儲けろ、それも外国人の懐中からだぞ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com